

# はじめに

長田俊樹

総合地球環境学研究所・国際日本文化研究センター

## 0. 序

この日文研叢書は国際日本文化研究センターの共同研究会『日本語系統論の現在』（班長：ボビン、幹事：長田）の成果報告書である。この共同研究会が開催されるようになった経緯からのべておこう。

個人的なことをのべるようで恐縮だが、この共同研究会の開催にいたる経緯と関連があるので、筆者とボビンさんの出会いからのべておこう。1996年3月から、文部省の在外研究員として、筆者はメルボルン大学にいき、ムンダ語の研究をおこなう機会をえた。そこでポール・シドウェル（Paul Sidwell）さんにあった。とうじ、かれはちょうど博士論文を執筆中で、筆者が専門とするムンダ語が属するとされているオーストロアジア語族のうち、ヴェトナムではなされているバーナール語の史的音韻論をテーマとしておられた。ムンダ語と関連のある言語を専門としておられるので、メルボルン大学の先生方のだれかに紹介され、話をかわすようになった。そのシドウェルさんがボビンさんの友人で、かれに紹介されたのがそもそのなれそめだ。ちょうどそのころ、『日本研究』に、「『日本語＝タミル語同系説』を検証する一大野晋『日本語の起源 新版』をめぐって」が掲載されたばかりで、その抜刷をボビンさんにおくった。そのときは、その抜刷送付が共同研究会に発展することなど、かんがえてもみなかったが、いまからおもえば、それが本共同研究会の出発点である。

メルボルンから帰国後も、大野晋（1996）論文への反論（長田1998）を執筆するさいには、日本語系統論にかんするボビンさんのこれまでの研究をおしえてもらうなど、Eメールを介して交流はつづいた。1998年には、ボビンさんがたまたま日本にこられたので、レクチャーとして、日文研で研究発表をしてもらったが、そのときの題が『日本語系統論の現在』、つまり本共同研究会のテーマであった。そのレクチャーのさいに、日文研には海外の日本研究者たちのために、共同研究会の公募研究という制度があることをボビンさんにつたえた。しかし、正直いって、そのときはボビンさんが本当に公募するなどとはおもってもみなかった。ところが、筆者のしらないうちに、ボビンさんは公募共同研究に応募し、1999年の2月には、2001年4月から一年間の公募共同研究に、ボビンさんの研究が正式にえらばれたのである。公募の選考委員会では、日文研のことや日本の言語学の事情がよくわからないボビンさんを補佐するために、幹事を長田にすることを条件に許可したが、その時点で、筆者の助手の期限が2001年3月にはきれることがわかっていたので、助手の期限がきれたあとは、客員として日文研にかかわっていくことになったのである。したがって、ボビンさんが共同研究会の研究代表者だが、幹事の長田も発足から、本共同研究会のメンバー選定や共同研究会の運営をまかされていたことにな

る。これが共同研究会発足までの経緯である。

なお、長田は客員にいただいたが、手続き上、日文研専任の幹事がどうしても必要だった。その日文研専任の幹事を、鈴木貞美教授がひきうけてくださった。また、鈴木教授はボビンさんを客員としてよぶときの招聘役もつとめてくださった。つまり、鈴木教授なしには、本共同研究会は成立しなかった。そのことをひとことのべておくとともに、この序において、鈴木教授に心から御礼をのべるしだいである。

## 1. 共同研究会の目的とそのメンバー

共同研究会の目的について、ボビン班長は研究計画書のなかで、つぎのようにかいている。

日本語系統論の研究は最近日本でも欧米でもさかんにおこなわれています。仮説がたくさんあっても、定説はまだありません。そのうえ、この研究の分野に、日本の言語学者と欧米の言語学者の協力がほとんどありません。それにしても、一方では八十年代と九十年代に日本語の再構が非常にすすんで、もう一方では、日本語と比較する諸言語の研究もすすみました。いまの立場からみれば、日本語系統の諸仮説のなかで、日本語が混合言語だという仮説と日本語がアルタイ系だという仮説が、一番見込みがあると思います。日本語系統論の研究をした日本の言語学者と協力しながら、意見を交換して、日本語系統論にも合意が成立することを希望しています。

この研究計画書は、ボビン班長が来日前に執筆したもので、来日後に、いろいろと事情をしるにつれて、日本では日本語系統論があまり活発ではないことをしる。しかし、日本と欧米の言語学者の協力という点では、本共同研究会の目的はじゅうぶん達成できたようにおもう。日本語系統論に対する班長の立場と幹事の立場には、かなりのへだたりがある。前者は楽観的だが、後者は悲観的である。発足前にあげた研究目的がどれぐらい達成されたか。それは共同研究員の皆様方、ゲスト・スピーカーとして発表してくださった諸先生方、また読者諸兄諸姉の判断にゆだねるしかない。ただし、さいごの「日本語系統論にも合意が成立すること希望しています」とあるが、残念ながら、合意が成立することはなかった。そのことだけを、ここで指摘しておく。

つぎに、共同研究会のメンバーについて、のべておこう。日本の言語学者をあまりしらないボビンさんにかわって、メンバー選考は長田が中心になっておこなった。その選考の基準は、五十歳ぐらいまでの比較的若手の言語学者であること、日本周辺言語の研究者であることの二点を提示し、ボビンさんにも了承していただいた。また、すでに日本語系統論にかんする論文などを発表している先生方には、ゲスト・スピーカーとして、参加してもらうことにした。

では、班長・ボビン、幹事・長田以外の共同研究員を、以下に紹介しておこう（敬称略）。なお、所属は共同研究会開催当時のものである。

家本 太郎（京都大学留学生センター・ドラヴィダ語）  
板橋 義三（九州大学大学院比較社会文化研究科・日本語形成論）  
大西 正幸（名桜大学国際学部・パプア諸語）  
風間伸次郎（東京外国語大学外国語学部・アルタイ語）  
切替 英雄（北海学園大学工学部・アイヌ語）  
児玉 望（熊本大学文学部・ドラヴィダ語）  
高橋 慶治（愛知県立大学外国語学部・チベット語）  
津曲 敏郎（北海道大学大学院文学研究科・ツングース語）  
中川 裕（千葉大学文学部・アイヌ語）  
林 徹（東京大学大学院人文社会系研究科・チュルク諸語）  
日野 資成（福岡女学院大学人文学部・国語学）  
福井 玲（東京大学大学院人文社会系研究科・朝鮮語）  
峰岸 真琴（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・オーストロアジア語）  
ウィリアム・ロジスキー（早稲田大学理工学部・言語学）

以上十四名にくわえ、途中から、以下の人々が共同研究員として参加された。

ブレイン・エリクソン（金沢工業大学・言語学）  
小林 正人（白鷗大学経営学部・インド＝アール語・ドラヴィダ語）

また、日本語系統論に関する論文を発表するなど、これまで活躍してこられた先生方を中心に、国内外をとわず、ゲスト・スピーカーとして、共同研究会にお招きした。以下に、ゲスト・スピーカーとして、お招きした方々のお名前をあげておく（敬称略）。

崎山 理（滋賀県立大学）  
松本 克己（金沢大学・静岡県立大学名誉教授）  
ジョン・ウィットマン（コーネル大学）  
ステファン・ゲオルグ（ボン大学）  
レオン・セラフィム（ハワイ大学）  
マーク・ハドソン（筑波大学）  
ユハ・ヤンフネン（北海道大学・ヘルシンキ大学）

共同研究会のメンバーのうち、家本氏は家庭の事情により、残念ながら、いちども参加されなかった。また、林氏と中川氏は大学がいそがしく、共同研究会での発表をおこなわなかったが、中川氏はこの報告書に論文をよせてくださった。つぎの共同研究会の日程をみていただければわかるように、ほかの十三名は、ふだん、日本語系統論と関係のない研究をしておられる方が多いなか、いろいろと勉強をして発表してくださった。なかには、はじめて上代日本語の

母音に甲類と乙類のちがいがああるということを知ったというつわものもいたが、それでも発表の日には、どこへだしても、はずかしくない発表にしあげておられた。共同研究会のメンバーとして、およびゲスト・スピーカーとして、共同研究会に参加して下さった方々に、この場をかりて、感謝の意を表したい。ありがとうございました。

## 2. 共同研究会の経過報告

さいしよの計画では、共同研究会は六回開催する予定だった。ところが、共同研究員に、遠方からこられる方々が多く、予算がオーバーしているとして、一、二月の段階では、五回でうちきられることになった。しかし、本共同研究会が一年だけの公募研究であることから、日文研の特別なはからいによって、さいごに、もう一回、開催することができた。日文研の共同研究委員会のみなさまのご配慮に感謝したい。

それでは、開催日程と発表者ならび発表題目を、以下に紹介しておく。

### 2001年

5月11日（金）

アレキサンダー・ボビン（国際日本文化研究センター）

「日本語系統論の現在：これからどこへ」

5月12日（土）

板橋義三（九州大学）

「日本語の形成過程の探究における現在位置－混成言語としての日本語：アルタイ諸語（含朝鮮語）とオーストロネシア諸語との関係－」

7月20日（金）

風間伸次郎（東京外国語大学）

「日本語、朝鮮語、及びアルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）は本当に似ているのか－対照文法の試み」

長田俊樹（京都造形芸術大学）

「日本語系統論はなぜはやらなくなったのか」

ジョン・ウィットマン（コーネル大学、ゲスト・スピーカー）

「6（もしくは7）母音説から見た Proto-Japanese-Ryukyuan と pre-Middle Korean の比較」

7月21日（土）

峰岸真琴（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

「比較形態論へのパラメトリックアプローチ」

9月22日（土）

津曲敏郎（北海道大学）

「ツングース語と日本語の文法上の類似点」

松本克己（元日本言語学会会長、ゲスト・スピーカー）

「日本語の系統と類型地理論」

9月23日（日）

ブレイン・エリクソン（金沢工業大学）

「Old Japanese and Proto-Japonic word structure」

崎山理（滋賀県立大学、ゲスト・スピーカー）

「日本語の形成におけるオーストロネシア語族の要素」

ユハ・ヤンフネン（北海道大学・ヘルシンキ大学、ゲスト・スピーカー）

「A framework for the study of Japanese language origins」

11月3日（土）

高橋慶治（愛知県立大学）

「チベット・ビルマ系言語と日本語系統論」

児玉望（熊本大学）

「膠着再考」

11月4日（日）

ウィリアム・ロジスキー（早稲田大学）

「When did the Japanese language arrive in the Archipelago?」

マーク・ハドソン（筑波大学、ゲスト・スピーカー）

「考古学からみた日本語系統論」

2002年

1月12日（土）

小林正人（白鷗大学）

「日本語の音節構造と連濁」

日野資成（福岡女学院大学）

「中央から東国への母音変化と前舌広母音の存在－上代の東国語と中央語の音韻対応をもとに－」

1月13日（日）

大西正幸（名桜大学）

「琉球語（特に沖縄北部方言）と日本語系統論についての中間報告」

福井玲（東京大学）

「古代朝鮮語についての若干の覚え書き」

3月9日（土）

切替英雄（北海学園大学）

「アイヌ語の人称接辞の祖形」

ステファン・ゲオルグ（ボン大学・ゲスト・スピーカー）

「Japanese, The Altaic theory, and the limits of language classification」

3月10日（日）

長田 俊樹

「共同研究会の報告書について」

これらの発表にもとづいて、本報告書は作成されている。しかし、発表者のうち、論文を提出されなかった人がいる。なかには、さいしょから、「論文としてまとめるのは日本語系統論の専門ではないのでご勘弁ください」と、発表しかおこなわないという約束で、共同研究員をひきうけてくださった方もいる。すべての方が論文集に投稿しなかったが、それにはそれぞれの事情がある。そのことをご承知おきくださればさいわいである。

### 3. 共同研究会成果報告

共同研究会の成果である本報告書について、のべておこう。この報告書は共同研究員とゲスト・スピーカーとして発表された方々がおもに執筆している。また、とくべつに、英文を編集してくださったハワイ大学のケリー氏にも執筆していただいた。執筆依頼のさいには、とくに条件をあげず、締切日だけをきめた。というのは、この論文集は商業出版ではなく、日文研叢書として出版することとしたため、枚数や内容に制限のある営利目的のある本では、ぜったいに書けない大論文を、おもいきり書いていただくためである。編集者の意図を理解してくださったのか、本論文集には長編論文がおおい。松本氏や風間氏の論文はかるく二百枚をこす。もちろん、枚数がおおいものがりっぱな論文だとはかぎらない。しかし、これらの論文は内容も充実した力作である。

本論文集の特徴とはいえば、日本語論文と英語論文でみごとに二分されている。

まず、日本語論文では、日本語系統論、そのものをあつかったものがすくない。松本氏や風間氏の意欲的な大論文をはじめ、ひとことでいえば、類型論的類似をあつかったものがおおい。松本氏はそこから一步ふみこんで、日本語の起源に言及している。しかし、一般的にいえば、類型論的研究から、起源論にふみこむことには慎重である場合がおおい。じっさい、そういった慎重派の論文（風間・津曲・児玉）のほうがおおかった。とくに、峰岸論文はあたらしい類型論をうちたてるためのこころみである。それがこれまでの日本語系統論とどうかかわっているか。そのことには、とくにふれられていない。逆にいえば、そんな論文も掲載されているのが、この論文集の特徴ともいえる。いっぽう、それにくらべ対照的なのが英語論文である。英語論文は、日本語系統論、あるいは日本語史に、ちよくせつ言及している。とくに、ゲオルグ論文、ヤンプネン論文、ロジスキー論文、そしてセラフィム論文は、いずれも日本語の起源や系統を正面からあつかっている。考古学や民俗学、先史学、人類学との学際的研究なしではすまない、日本祖語の起源地にまで言及している論文もある。いまの日本では、こうした論文

はあぶない議論として遠ざける傾向にある。

日本語論文と英語論文の相違は、どこに原因があるのだろうか。やはり、日本とアメリカの言語学、とりわけ日本における日本語系統論の位置づけとアメリカにおける日本語系統論の位置づけがことなる。そこに、おおきな原因があるのではないか。それが証拠に、日本語論文のなかで、じゅうらいの日本語系統論のわくぐみを堅持した論文の執筆者、板橋氏と日野氏、また日本人で唯一英語論文を執筆した小林氏は、偶然の一致のごとく、いずれの三人もアメリカで言語学の博士号を取得されている。筆者はこのことを偶然の一致とはおもわない。あきらかに、日米での日本語系統論に対する考え方を反映している。そうとらえたい。これは筆者じしんの経験からいうのだが、日本の大学において、言語学を専攻し、1980年ごろの大野晋による「日本語＝タミル語起源説」にはじまる日本語系統論騒動をしっているものは、日本語系統論に、まともにはとりくまない。そんな傾向がある。こうした傾向は言語学者のほうに問題がある。そのことはまちがいない。しかし、それがほかの分野の研究者にも影をおとしている。それもまた事実だ。たとえば、日文研が中心となっておこなった特定領域研究「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」では、奇妙なことに、さいしょから言語学が除外されていた。このような愚挙に象徴されるように、学際的研究を推進する側も、こうした問題では言語学や言語学者を信頼していない。日本にはそういった不幸な環境があることも、ここで指摘しておきたい。

ところで、論文集の序には、論文集に掲載されている論文の内容がコンパクトに紹介されている。それが一般的だ。じっさい、英語の序文を執筆したボビン班長は、共同研究会の発表内容をすべて紹介している。しかし、筆者はそうした紹介はここでおこなわない。筆者は編者に名をつらねているが、内容にはいっさいタッチしないことを原則としている。筆者じしん、日本語系統論にうとい。また、ある編集方針にもとづいた、統一された体裁の論文集をめざす。そんな信念も、幸か不幸か、もちあわせていない。正直に言って、性格的にそんな芸当ができない。すでにのべたように、編者の意図はそれぞれがすきかってな持論を枚数にこだわることなく、おもいきり書いてもらうことにある。したがって、それを管理することにもなりかねない編集者のチェックは、いっさいしないことにした。もちろん、なかにはコメントをもとめた執筆者もいた。そういう方々には、筆者がわかる範囲で、コメントをおくったが、それは個人的なものであって、編者としての仕事ではない。書くことをためらっていた人々に、なんとか執筆してもらうために、執筆意欲をたかめること、締切日をなんとかまもり、出版にこぎつけること、論文の執筆要項を『言語研究』に準じるとの方針を決定したこと、などが編者の仕事である。本論文集に掲載された論文は、それぞれの執筆者による用語法で、それぞれの意見をまとめたものであって、編者の意見や編集によるカットなどはいっさいない。そのことをおことわりしておく。また、よく指摘をうけることだが、筆者は独断と偏見でものごとをみがちだ。本人は事実をつたえているとおもっていても、発表や論文を、発表者や執筆者の意図とはちがい、ゆがめて紹介している。そういう可能性もじゅうぶんある。そうなると、あとで苦情をうけかねない。それでは、発表者や執筆者にもうしわけない。そういう配慮もあって、それぞれの発表要旨をまとめたり、論文を紹介したり、そういうことはしない。この「はじめに」で、

論文集の概要をしようとした人はあてがはずれたかもしれない。それぞれの論文のエッセンスをしりたい方は、英語の序文をごらんください。

なお、英語論文について、ひとことだけ注記しておきたい。セラフィム論文、ヤンフネン論文、そしてエリクソン論文のなかに、Japonic という用語がみうけられる。これは、Japanese (日本語) と Ryukyuan (琉球語) の祖語 (一昔前は、共通基語とよばれることがおおかったが) の段階、日琉祖語をさすか、両言語をあわせて、日琉語という意味をもつ。これまでの日本語系統論では、あまり使用されてこなかった用語法である。琉球方言 (あるいは沖縄方言) はあくまでも日本語なのだから、琉球語と日本語の共通の祖先も、おなじ日本語にちがいはない。そういう立場が一般的だった。しかし、琉球語にも日本語とおなじステータスをあたえ、その祖語は Japanese ではなく、Japonic としよう、という立場が反映されている。ミスプリントだとおもわれる方がいるのではないか。そうかんがえて、注記しておく。もっとも、日本では、大野晋や安田徳太郎のように、厳密な研究をめざすのではなく、ストーリー性やロマンをもとめがちなので、こうした厳密な区別はあまり意味をもたないのかもしれない。

#### 4. 共同研究会をおえて

さいごに、共同研究会の感想をのべておこう。筆者は日本語系統論に懐疑的である。それは長田論文をよんでいただければわかるはずである。ここではくりかえさない。しかし、今回の共同研究会でおどろいたのは、ボビン班長をはじめ、日本人研究者以外の、海外の言語学者たちが日本語の起源に多大な関心をよせていることである。このことは、英語論文をみていただければ一目瞭然である。また、英語論文をよむのがおっくうな人は、日本語で書かれたボビン論文をみてもわかるはずである。ついでにいえば、この論文はボビン班長のはじめての日本語による本格的な論文である。そのボビン論文では、日本において、ほとんど紹介されることがないスタロスチンの論文が批判の対象になっている。ただし、残念ながら、執筆時にはまにあわなかったので、最新刊の Starostin & Dybo & Mudrak (2002) には言及していない。また、ボビン班長じしんの研究が日本語によって紹介されている。これは日本語系統論研究史にとって、画期的なことである。日本人のアイデンティティさがしの意味がおおきい日本語系統論は、日本人の専売特許だとかんがえがちだ。ところが、ロシア生まれのアメリカ人が日本語で日本語系統論をろんじている。ここに、日本語系統論の背後にしるのびよる、ナショナリズムの呪縛からの解放をみる。そういうとおおげさだろうか。

この共同研究会への感想はと聞かれれば、成功だったとこたえるだろう。この成功は幹事である筆者による自画自賛を意味するのではない。その成功は、あたりまえのことなのだが、ボビン班長のおかげである。そこで、その成功した理由をあげておきたい。まず、日本人同士が日本語系統論をろんじるときは、それぞれが自説を展開して、けっしてまじわることがない。じつは、1995年に、日文研に大野晋氏をおまねきして、シンポジウムを開催したことがある。その経緯とその後の論争については、家本・児玉・山下・長田 (1995)、大野 (1996)、長田



(1998)をぜひ参照していただきたい。そのさい、大野氏との討論は、自説だけをのべて、けっしてまじわることがなかった。そういう貴重な体験をあじわい、これでは真理の追究はむずかしいと痛感した。そのことを鮮明に記憶している。ところが、そういった自説だけがただしいといった態度が、ボビン班長にはなかった。あくまでの実証的な態度をくずさなかった。それがこの共同研究会が成功した第一の理由である。つぎに、ボビン班長の古典文献に対する造詣の深さにも、おどろかされた。たとえば、その語形は『古事記』のどこどこにだけ掲載されているといったことを、コンピューターの画面をみるでもなく、索引をめくるともしないで、よくそらんじてみせた。こうした知識のつみかさねがボビン班長への尊敬をうみ、共同研究会をスムーズなものとした。そういった場面もなんどかあった。また、ボビン班長はじめ、外国人の発表者が流暢な日本語を駆使して、活発な議論をすすめたことも、日本人共同研究者にとっては、好感をもつ、ひとつの要因となったことはまちがいない。その好感さもまた、成功の秘訣であった。そう、しんじている。

ボビン班長たちの研究によって、すくなくとも、日韓両語の系統関係については、いずれ証明されるのではないか。そう期待をいだかせた。そう期待をいだかせるに足る、班長の学識と努力には、すなおに敬意をはらいたい。しかし、それでもなお、やはり日本語系統論は衰退したままであろう。そういう展望だけはかわることはなかった。日本に日本語系統論を推進させる、言語学内外の機運が、この本によってうまれる。それを予感させる兆候が、筆者には、まったくみえてこないからである。しかし、この共同研究会報告書によって、あらたに日本語系統論に関心をもつ人があらわれるかもしれない。いや、きっとあらわれるにちがいない。そうした人が、かなり長いスパンで日本語系統論にとりこんでくれたならば、また状況はちがったものとなるはずである。

筆者はこの共同研究会が成功だったとのべた。しかし、成功イコール日本語系統論の解決を意味しない。むしろ、暗黒のなかに一条の光明がさした。そんな表現が妥当である。この一条の光明が暗雲をおいはらい、雲のすきまから、太陽が顔をだす。そんな比喻が妥当かどうか、わからないが、そういった状態になってほしいとねがっている。たしかに、日本語系統論が活発化するという予測には悲観的だが、そうねがう気持ちには、いつわりはない。こんど日本語系統論があるていど積極的に議論されるようになるかどうかは、この論文集がどのように評価されるか、それにかかっている。もちろん、じぶんが編集する論文集に過度の期待をよせるのは、自己宣伝をうぬぼれとみる日本人にとって、あまりいいことではない。しかし、大野晋によって、ほんらい実証的な日本語系統論が信仰の世界においやられてしまった現在、ぜひみなさんに、つぎのことをうったえたい。とにかくにも、日本語系統論を忌避する人も、それに興味のない方も、できるだけ多くの方々に本論文集をよんでいただきたい、と。そして、できうれば、書評やコメントなどを発表していただきたい。そうすれば、一条の光明が晴れ間をうみだすかもしれない。

さいごに、共同研究会の幹事という立場にありながら、日本語系統論に否定的なことをのべつづけてきた懺悔の意味もこめ、ボビン論文を引用して、この「はじめに」をおえることにする。ボビンさん、一年間、どうもありがとうございました。

日本語系統論において基礎語彙の比較は、あまり決定的な結果には至っていないが、今すぐ諦めずに、このような細かい文法要素の比較を行っていけば、徐々に日本語の系統が分かるようになるだろう。長田（本論文集掲載）は否定的だが、私はそう期待している。

## 参考文献

- 家本太郎・児玉望・山下博司・長田俊樹（1996）「『日本語＝タミル語同系説』を検証する一大野晋『日本語の起源 新版』をめぐって」『日本研究』13：248-169。
- 大野晋（1996）「『タミル語＝日本語同系説に対する批判』を検証する」『日本研究』15：248-186。
- 長田俊樹（1998）「比較言語学・遠隔系統論・多角比較一大野教授の反論を読んで」『日本研究』17：404-373。
- Starostin, Sergei A., Anna Dybo and Oleg Mudrak (2002) *An Altaic etymological dictionary*. Leiden: E. J. Brill.